Vol. 11

フォーラム通信

Newsletter 11

2026

Topics 御殿場市でリノベーションまちづくり講演会が開催 講師がまちの空間を自分たちの”居場所”に変えるメソッドを語る

先月14日、御殿場市において、リノベーションまちづくりの機運醸成を目的に講演会が行われました。 講師には株式会社ハートビートプランの園田聡氏が登壇。「パブリックライフ」を育むためのプレイスメイキングの理念と、全国各地での実践知を交えながら、これからの持続可能なまちづくりのあり方について講演しました。





園田氏は冒頭、行政による施設整備だけでは人が集まらない現状に触れ、「単なる物理的な『スペース（空間）』を作ったからといって、すべてが愛される場所になるわけではない。大切なのは、誰がどんな気持ちで過ごすのか、適切な活動と心地よさを伴う『プレイス（居場所）』へと変えていくプロセスを設計することだ」と説明。

「大型商業施設があって便利だから豊かだという人もいれば、古くからの馴染みの店が残っているのが豊かだという人もいる。目指す豊かさのイメージは人それぞれ違うからこそ、まずは自分たちが『誰かに語りたくなる暮らし』をきちんと作るというビジョンを共有することが欠かせない」とし、「課題をゼロに戻すマイナス解消の取組だけでなく、地域の良いところを伸ばし、多様な人が混ざり合う複合的な場所を作ることがまちの魅力に繋がる」と語りました。

その上で、園田氏は自身が伴走する長野県松本市での実践を紹介。まちのビジョンを策定後、いきなり大規模な工事を行うのではなく、まずは民間主導で低コストの「社会実験」から始めたプロセスを解説しました。

川沿いに仮設の飛び石やベンチを置いて憩いの場を作ったり、車中心だった道路を歩行者空間に変えてマーケットを開いたりした取組を挙げ、「いきなり100点を目指すのではなく、小さく試して、日常の風景を変えていくことが大事だ」と説明。結果としてこれらの実験が評価され、行政による十億円規模の本格的なインフラ整備や、新たな複合施設建設といった数十億円規模の民間投資へと発展したエピソードを語りました。

また、こうした取組を進める上での行政と民間の関わり方に触れ、「ただ行政に『お願いします』と要望するのではなく、お互いにリスクを取る対等なパートナーとして連携することが重要。民間事業者が自身の商売を良くする活動に、行政が『公共的な意義』を見出して支援する。この『三方よし』のストーリーを翻訳してつなぐ役割が地域には必要だ」と指摘しました。

最後に園田氏は、「一番大切なのは、自分たちの手でまちの空間を変えられるんだ、という感覚を持つこと。まずは身近なエリアで、仲間と一緒に美味しいコーヒーを飲むような小さな楽しみから、自分たちが愛せる日常を一歩ずつ形にしていってほしい」と、今後のまちづくりへのエールを送りました。



御殿場市リノベーションまちづくり担当　朝倉 大貴 氏
「まちの魅力は、誰かに与えられるものではなく、私たち自身の手で育てていくもの。今回の講演を通じて、その可能性を改めて感じました。御殿場にも魅力的な人や場所、挑戦の種がたくさんあります。行政も民間も市民も、それぞれが主役となり、小さな実践を積み重ねながら、自分たちが誇れるまちの未来を一緒につくっていきたいと思います。」

御殿場市では来年１月23日（土）と24日（日）の２日間にかけて、「御殿場エリアリノベーションキャンプ」（スクール型事業）が開催される予定です。